
敦煌莫高窟第249窟、第285窟天井壁画の制作過程について
—魏晋南北朝時代における墓葬美術との関係を中心に—

神戸大学 田林 啓

北魏末から西魏初に開鑿されたとされる敦煌莫高窟第249窟、第285窟の天井壁画は、仏教的モチーフと共に墓葬美術に用いられる神仙図像を多く描く。このような窟は、莫高窟において後にも先にも存在しない。この天井壁画に関する先行研究の多くは、各図像の特色に見合う記載を持つ文献資料を主な根拠としてその世界観を考察するというものである。また2窟の神仙図像表出の背景には、北魏末の東陽王元榮の瓜州赴任に伴う中原文化の流入があると一般にされる。本発表は、図像様式及び構図に着目することで、2窟の天井壁画制作の経緯を考察するというものである。

2窟では畏獣像、多人頭獣を頻出させるという共通点を持つ一方、第249窟では龍・鳳車を、第285窟では伏羲・女媧をそれぞれ出現させるという違いがある。また、構図としては第249窟では全披面に龍・鳳車、阿修羅等の中心モチーフを設け、他の神仙図像をそれに付随させるのに対して、第285窟では中心モチーフを設けずに東披以外の各披面の神仙図像は西披の中央へ向けて一斉に奔走する様子を表す。そして、画法的には両窟共に西域的な濃い暈染が未だにみられるということが指摘される。

次に魏晋南北朝時代の墓葬美術を概観すると、仏爺廟湾西晋墓、嘉峪関新城墓等の敦煌周辺の墓では畏獣像や伏羲・女媧のみが2窟と共通するが、北魏末の洛陽出土爾朱襲墓誌(西安碑林博物館蔵)、瀘河石棺(洛陽古代芸術館蔵)等では多くの神仙図像及び構図が2窟と共通し、仏教的モチーフもみられる。そのため、2窟は北魏末の洛陽墓葬美術の影響を受けたといえる。そして、その影響は畏獣像のみを壁面最下層に表現した同じく北魏末開鑿の河南省鞏県石窟を介さず、より直接的なものであったと考えられる。更に洛陽墓葬美術の神仙図像の構図を分析すると、第249窟の構図の方が第285窟のものよりも墓誌蓋等の重要視される画面に採用され、第285窟の方が下位のものであるといえる。これは、第285窟は第249窟と異なり、天井以外の壁面にもそれ以前の窟には見られなかった強い主張を持った新たな図像を表した為であると考えられる。

しかし、洛陽の墓葬美術及び2窟に最も多く登場する畏獣像の様式に着目すると、洛陽墓葬美術像では必ず備えている袴の先端から布を出す等の要素を2窟のものでは備えていないことに気づく。そして第249窟像、第285窟像と同様の様式を持つ畏獣像は、それぞれ仏爺廟湾西晋墓、梁代の南京蕭宏墓石碑にみることができる。また、第285窟に描かれたような伏羲・女媧も洛陽ではみることができず、嘉峪関新城墓や仏爺廟湾西晋墓では存在した。これによって2窟の天井壁画には洛陽の強い影響があったものの、一部の図像は敦煌周辺の墓葬美術や部分的に伝わってきた南京墓葬美術のものを採用していたといえる。そして、それは一つに中原からの新来の工匠によってではなく、西域的画法を用いる敦煌既存の工匠によって制作された事に因ると思われる。